
魔法少女リリカルなのはStrikerS ナンパ男は六課局員

相川 一真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ナンパ男は六課局員

【Nコード】

N7871Y

【作者名】

相川 一真

【あらすじ】

機動六課。それは有名なエース達や、将来有望と言われている天才達で編成された正に規格外な部隊。その天才や秀才で組まれたフォワード部隊の一人は、軽率そうなナンパ男!? 迫りくる困難や自業自得な試練を、あの手この手と卑怯な手を使ってかいくぐり、目指すは男にとって夢の楽園! ……なんてうまい話なんてない。凡人には凡人が出来る量でこつこつお仕事やって参ります。そんなStrikerS再構成ストーリー

定期更新……できたらいいなあ

parto プロローグ(前書き)

そんなこんなで初投稿。すぐに第一話を投稿致しますので少々お待ち下さい。

part 0 プロローグ

ミッドチルダ 陸戦魔導師ランク試験会場 AM 11:00

巨大な魔法都市、ミッドチルダ。

廃墟区画と呼ばれる町のビルの一角。その屋上に三人の少年少女の姿が映った。

「……ふんッ！」

その中の一人、青い髪をした少女が自らの手に装着された機械的なナックルを振りかぶる。

ローラーシューズに物々しいナックルと、明らかに物騒な装備をした少女に、何者かが話しかけた。

「こらスバル、最初から飛ばしてるとあとでそのオンボロローラー逝かれるわよ」

「あ、ひっど〜い。ティア、ちゃんと油差してきたよ〜？」

？ティア？と呼ばれた橙色の髪をした少女は、自らの手中におさめられた一丁の銃を整備しながら話しかけると、？スバル？と呼ばれた少女は少々機嫌を損ねたか、少し古いローラーをその場で吹かしてみる。

すると元気というのが見え見えなほどローラーはいい音を立ててスバルへ答えた。

「ほら、ね？」

「はいはい……せいぜい試験中にトチらないでよね。足手まといも

いるんだし」

「アハハ……大丈夫。きつと受かるって」

後方へ向けて軽口を叩く少女に、スバルは苦笑いしながら腰に手を当てて少女の奥を見る。

すると、黒い影が少女の肩へと突然回された。

「だ〜いじょうぶだつて、ティアナちゃん。俺様愛しのハニーの邪魔だけはしないって」

「肩触んなこのエロスツ！」

「あいたあつ!?!」

手を回していた赤髪の少年へ、ティアナは容赦なく鉄槌を下す。

すると地面に転がった少年は涙を眼に浮かべながらティアナの方を振り向いた。

「ティ、ティアナ！ 俺様はゼロスだつて何度言ったら」

「くだらないことするからよ。今度やったら倍よ」

赤髪の少年　ゼロスと呼ばれた少年はぶーぶー呟きながらスバルを発見した。

そのままわきわきと手を動かしたが、ナックルが構えられたことにより即座に諦めた。

どうやらこの少年。女の子ならだれでもいいらしい。

ぶつぶつ呟いて腰におさめられた2本の長剣、日本で言う日本刀に部類される物を取り出すと、おもむろに磨きだした。

その綺麗な剣身からして、よく手入れされているのだろう。

一方、整備を終えたティアナが上空に表示された時刻をチラとみると、十一時半を迎えていた。すると、ちょうどその時刻を知らせるモニターの横に、同じサイズのモニターが表示される。

そしてその映像に可愛い女性が映った時、三人はその正面へ立った。

『はい。時間ちょうどですね！では、今回つける試験は魔力ランクB。でよろしいですか？』

「はいー！」

「は、は、はいッー！」

その女性の可愛さがあったか、ゼロスは目をハートにしてどもりながら答える。

それにモニターに映った女性は苦笑いすると、進行重視なのか咳をひとつ出すと、しゃべりだした。

『では確認を、ティアナ・ランスター二等陸士。スバル・ナカジマ二等陸士』

「はいっー！」

自らの名前を呼ばれたのとはほぼ同じタイミングで敬礼をする二人。それに満足したのか、残りの一人の名前を読み上げた。

『最後に、ゼイロス・オズウェルト二等陸士。これで最後ですね。お相手はわたくし、リインフォース？陸曹長が務めさせていただきますー！』

「はいっ！ 後できればこれが終わったら私と一緒にデートでも」
調子のんな！」「あふん」

未だハートマークの目をしながら、ゼイロス、もといゼロスは猛烈なアプローチを始める。

が、横に並んだティアナの重い一撃に呆気なく撃沈してしまったが、普通に前衛になればいいのに。ゼロスは本気でそう思ったそうなの。

『で、では気を取り直して、今回の試験内容は理解していますよね』

「はい！ フィールドに置かれているスフィアを全て落として、ダミーに気をつけながらゴールへ。」

時間内にクリアできれば試験合格。 ですよね」

『その通りです。ダミースフィアは攻撃してしまうと減点になってしまうので、要注意ですよ！』

その言葉に2人（1人は撃沈中）は勢いのある返事を返すと、それぞれの準備を始める。

もちろんその間にもゼロスは復帰して、たんこぶを痛そうに擦っていた。

『はい、準備は終わりましたね。ではGOサインと同時にスタートしてくださいです！』

では、健闘を祈ります！！』

その言葉とともに陸曹が映ったモニターは消え、代わりにGOサインのための表示が現れる。

そして……それが青となったとき、試験は始まった。

「GO……」

part 1 試験中はお静かに できません(前書き)

第一話まで連続投稿。

第二話は来週のどこかで投稿致します。

part 1 試験中はお静かに できません

「GO!」

放たれた言葉を皮切りに、三人は同時に別々の場所へと散っていた。この試験はタイムアタック、恐らく別々に分かれての殲滅が目的らしい。

その試験の様子は、上空に滞空しているへりによって撮影がされていた……

「おおーやつとるやつとる」

「はやて、おっこつちやうよ。ドア閉めて」

はいはいと陽気な声を出して座席へ座ったのは『八神はやて』。

十年前、ある事件をきっかけに魔法と関わりをもち、天性の才能で登りつめた捜査官。

歩くロストロギアと呼ばれており、その二つ名に恥じない実力の持ち主だ。

一方、先ほどはやてに注意を促したのは『フェイト・T・テストロツサ』。

同じく十年前、はやてとは別の事件をきっかけに管理局へと入った天才中の天才。

執務官という職務は命がけであり、それをこなしているのはやはり才能なのだろう。

「この三人？ なのはが欲しいって言ってた子達」

「うん、なのはちゃんもどっかで見てるんちゃうかな」

なのは。と呼ばれた人物は、この三人にかかわる大事な人物だ。だが、ミッド中で有名な彼女は、もはや語ることもないだろう。

「楽しみ。だね」

「そっやなあ〜」

二人の女性の視線はまっすぐにモニターへと向いていた。

魔法少女リリカルなのは ナンパ男は六課局員

【〜part1 試験中はお静かに〜】

Side:ゼロス

「そおらっ!」

「よいしょっ」

途中で合流した俺様とスバルは、同時にガジェットを数体スクラップに変える。

まったく、このお転婆お嬢様は……がんばって鍛えた俺様より筋力上とか、なんやねん。

おっと、つい変な言葉を言っちゃまったぜ。まあとにかく! このじやじや馬は馬鹿ってことよ!!

……誰に言ってるんだ？ 俺様。

「ゼロス、今失礼なこと言わなかった？」

「イエー。ナンノコトデシヨウカスバルサン」

「……怪しい」

ちくしょう、なんてやつだ、人の思考読むなんてどんなイノベーターよ。

まあ可愛い笑顔を拝めただけでも俺様役得ですけどね。ぐへへへへぎゃひい！…！」

「途中から声に出てるよ！」

「ず……ずびばぜん」と、ティ〜アナちゅわ「あ、ティア！」ぐへえ」

走りながらコントをしていたらティアナを見つけた。

だがしかし、俺様の見事なルパンダイブをはじめこの犬っこは一番に飛びつきやがって……

……ちくしよー、いいなー。俺様も抱きつきたいなー……

「ただしゼロス、あんたは駄目よ」

「なんでっ!?!」

ここは心の読めるやつばっかか！ 俺様のプライベートもしかして筒抜けか!?!?

side:out

「……おろ？ 出て来いひんなあ」

「どうしたんだろ、スフィアも壊れちゃったし」

はやてとフェイトは今、困惑していた。

監視用スフィアが破壊されたのだ。三人が合流し、おかしなコントをやっているところまで捉えていたのだが……

ゼロスが閃光から二人を庇っているところが映し出された瞬間、モニターがティアナの銃により破壊されてしまった。

彼らのレベルならスフィアくらい三分ほどで片づけそうだが、現在十分以上が経っていた。

流石に救援を呼ぼうかとはやてが腰を持ち上げた。その時

！

「あ、きた！」

「うえ！？ あ、いったあ……」

「だ、大丈夫？ はやて」

突然声を挙げたフェイトにより、びっくりしたのははやては思い切り天井に頭をぶつける。

そのまま頭を擦りつつ、涙目でモニターを見たその先には、驚きの光景が広がっていた……

side:ゼロス

「うつひゃー！！!?」

俺様の情けない声とともに、その脚は全速力で動く。

なぜかって？ それはね、俺様の通った道にコンマ数秒ほどで魔力弾の雨が降るからさ。

……いや笑い事じゃねえし！！ 俺様のバリジャケットすんごく薄いから当たったら昏倒もんだぞコレ！

まあ、俺様が命がけで走っている間になにがあったのかを話しておこうと思う、心して聞くように！！

……え？ いらない？ アニメで補完バッチリ？ いやいやそんなこと言わないで聞いて下さいよww

まあまず、二人で百合ん百合んしてるスバティア達を、俺様はあつたか〜い目で見てたわけだ。

でもそのとき、英雄になりたい俺様のセンサーが、今まさに2人を撃ち抜こうとするスフィアを見つけたのさ。

でもって、思い切つて庇つてみたけど俺様魔力量低いからバリアも張れずに無残に受けちゃったわけで。

そのせいで本来羽織ってるはずのジャケット燃えちゃって、泣く泣く捨ててきたわけだけど。

んでもって、魔力がほとんど残ってない俺様を見て、愛しのティアナちゃんが閃いたわけだ。

『無駄に走れて、戦闘にも出せないゼロスを囿にして中型スフィア倒しちゃうおう作戦（スバル命名）』を……

……もう、ね、なんの冗談かと思ったよ。

俺様命の恩人よ？ 「素敵！ 抱いて！」 って言われるほどハードボイルドに守ったのに囿ってなによ。

相変わらずそっけない顔で「あんた囿」って言われた時はもう折れたね。うん。

……まあ、そんなわけで、お2人さんががんばってる間、俺様はただ……

「走る！（ドヒュン！）あー、撃たーれーるー！！」

「……よし、ゼロスの奴。上手くやってるみたいね」

「ゼロスを目立たせてそのうちに反則ギリギリなことしようってのはよかつたけど……」

大丈夫なの？ ティアもゼロスもダメージ受けちゃって長いこと持たないよ？」

ゼロスが全速力でスフィアを攪乱しているその時、コンビは見渡しのいいビルの屋上にて陣取っていた。

狙うはこの試験の最終関門、自動ロック式オートスフィア。
Bランク試験を受けた生徒は大体ここで落ちてしまおうというまさに
登竜門といったところだ。

しかし、先ほど余裕そうだったゼロスもスフィアの集中攻撃を受け
てしまい、いつ倒れるかわからない。

この作戦は攪乱している人物が落ちてしまおうと途端にこっちが目立
ってしまい、反則が適用されるかもしれない。

しかも、本来なら辞退するほどのダメージを負ったメンバーが2人
もいるなら尚更だ。

「うつさい、あんたはしつかりスフィア壊して、全速力で走る。そ
れだけよ」

「……………うん、わかったっ！」

子供のような笑顔をスバルは浮かべると、それを見たティアナは安
心したのか「しつかりね」と言葉を残して指定位置へと戻った。

「よし……………いくよ、みんな」

ポツリ、と呟いたその言葉。

本来なら絶対に聞こえることのないその声は、確かに全員へと響き
渡っていた。

そして、つぶやきに呼応して、スバルの足元に三角形の魔法陣が姿
を現す。

綺麗な青色の光は、限界に近いことを知らせる為に強く輝く。

そしてそれが臨界点を突破したとき、スバルは大きく空へ叫んだ。

「ウイング！ ロード！！」

その言葉をキーにして、青い帯状の魔法陣が目的のビルへと突き刺さる。

この魔法は、空を飛べない陸戦魔導師が、せめて空へと近づけるようにと造られた翼の道。

そしてそれに向けて、スバルは全速力で走り出した！

「おおおおおおおッ！！！！」

ビルの壁はそのナツクルによって、呆気なく穴をあけられる。

その中には、己を魔法を通さぬバリアで身を固めたオートスフィアの姿が確認できた。

侵入者を迎撃するために、スフィアはその目標を探る。

そして、砂煙さえ意味をなさないその圧倒的性能によって、スバルの姿はとらえられた

ヒュンッ！

空気を切るような音とともに閃光がその場所を射抜く。

それにより砂煙は晴れ、撃ち抜かれたスバルの姿がそこに

「あああああぁっ！！」

なかった。

作戦の一つ。ティアナが行使できる幻術を使うことにより、スフィ

アをしとめにいく。
簡単だが、その分リスクが大きい。特に幻術は魔力を大量消費するのだ、切れるのは時間の問題だろう。

幾数にも分身したスバルが迫り、手当たり次第に砲撃を撃つスフィア。

そんな状況の中、1人だけ砲撃をかいくぐったスバルは、そのナツクルを強引にバリアに突っ込んだ。
金属音が鳴り響き、徐々にバリアが破壊されていく。

しかし、分身によって意識がそちらにいつてるスフィアには、それは気付かないことであった。
そして、数秒後。

ガシユンッ！ という音とともに薬莢がナツクルから排出され、スバルの魔力を高めていく。
そして罅が入ってしまったバリアは、呆気なく侵入を許すことになる。

バリアが破られたことに気づくと、スフィアは慌てて本物のスバルのほうへ意識を移す。
しかし、それはもう遅い。

「一撃、必倒ッ！！」

魔力が左手に集められ、それをスフィアの機体に押しつける。
そしてそれを、自らがあこがれる人の技の名前を叫んだ！

「デイバイイイイン、バスタアアアアーーーーーッ！……！！！」

放たれる青い魔力の放流。撃ち抜かれる機械の屑。
勝負は、一撃で雌雄を決した。

side:ゼロス

「倒した、か……ってのわあっ!?!」

さっき念話で、ティアナが「片づけた」と言っていたからもうここへ向かっているんだろ。

ま、それまでに持つかな……今もう結構意識が……

「っと、おっせえぞ2人組!」

ふらつき、魔力弾を受ける直前でスフィアが爆散し、辺りに鉄屑がちらばる。

まあ、それをやったのはチームで射撃名人なあのお方しかいないわけ……

「ティ、ティアナちゃん!! 俺様怖かったあ〜」

「うっさい!! ほらスバルにさっさと捕まんなさい! 置いてくわよ!~!!」

「そ、それはご勘弁を!」

……ん? 捕まるとな。スバルちゃんに。

っていうことはあ、変なとこ触っても「焦ってたんだよ、テへ」
で済むわけで……

「よっしゃあ！ バッチコ」変なとこ触ったら殺すからねゼロスッ
！」「……はい」

やっぱり俺様の思考は読まれるらしい。ちくしょう、いいじゃねえ
かラッキーイベントくらい。
男の子ならだれでも懂れるんだぞー。

「理想と現実をこっちゃんにしないの！ ほら、時間なくなる……！」
「いやだから……もういいや、よいしょっと」

いいもんいいもん、俺様めげないもん、強い子だもん。
きつといつかそういうイベントが……あれ？

「お前ら、このスピード、止まれんの？」

「」「……」「」

俺様の何気ない一言に、一気に黙り込む2人。

……あるえ？ これってもしかして……あれですか。

「止まらない、んだよな」

「「あ、あつたりまえでしょおおおおつ！！」「」

どうやらお2人さんはようやく現実を理解したようだ。よかったよ
かった……

いやよくねえわ！ 俺様まで巻き添えじゃん！

「ふ、ふざけんなよお前らっ！」

「しようがないじゃないこれ以外なかったのよっ!!！」

「あわわわわ、ぶつかるううっ！」

ああ、俺様はハーレムを作れずに死んでしまうのか。

いや、スバティアさえいれば、俺様天国でも地獄でも別に……うへへへ。

「ホーリンググネット。それとアクティブガードね」

「(´・`・´) あふん」

妄想させさせてくれなかったぞこんちきしょう。

「はあ、機動六課。ですか」

「そや、3人は試験にはおっこてしもたけど、その技術を買ってスカウトしたいんや」

ティアナが冷静に答えているが、俺様はそれどころではない。

結局違反ということで試験には落ちてしまったわけだけど、なんと美人さん3人が俺様たちをスカウトだってよ。

しかも管理局三大美人と謳われる高町なのはとフェイト・T・テストタロツサと八神はやて！

くううっ！ これを興奮せずしてどうするか！ 男として！！

ちなみに俺様の好みははやてさん一択だ。やべえよはやてさん。結婚して下さい。

「わたしより貯金が上になってから出直してや」

「それなんて無理げー？」

「あはは……面白い子なんだね」

「いえ、馬鹿なだけです」

俺様がはやてさんとコントしている間に、結構話は進んだようだ。スバル的にはなのはさんにぞっこんだし、まあいくだろう。

ティアナも執務官が云々とか言ってたし、行くのは確定。

なら……俺様もいくっきゃないっしょ！ その美人の花園に！

「あ、ゼイロス君はやっぱりええよー」

「ぐへえ」

な、なんだって！ はやてさんとはさっきのコントを通じてナマカになったと思っただのに！

「これが現実なんよ。ゼイロス君」

「くっ、これだから大人ってやつはあー！」

「にやはは……ほらはやてちゃん。話戻すよ？ えーとね、やつぱり私的には3人には来てほしいと思ってる。それぞれ目指している分野について色々アドバイスできるし、ゼイロス君の場合進路も見

えると思つんだ」

「はあ………」

確かに、進路決まってるないの俺様だけなのか。

むう………確かに今までは救助隊でひーこらひーこらしてただけだし、ここで一年過ごすのも一興力毛。

しかも！　そこが女の子だらけなら尚更だぜ！！

「よつし、じゃあ2人とも、いいか？」

「ええ、私は構わないけど。スバルは………もうわかりきってるわね」

そこには犬っこモードで尻尾をブンブン振っているスバルが、もふもふしたいっす。

「あはつじゃあ決まりだね！　六課は一年限定だけど、しっかり育てるから安心して！」

「一週間後、この場所に来たってや。地図送るから、端末のアドレス教えてな」

「是非！！」

思いっきりアドレス差し上げたらなんかティアナに撃たれた。痛かった。(月×日　ゼイロス・オズウェルト)

part 1 試験中はお静かに できません(後書き)

そんなこんなで始まったこの小説

正直色々な批判飛んでこないかビクビクです……！(ビクンビクン)

さて、ナンパ男ゼロス(本名:ゼイロス・オズウェルト)は物語に
どんな改変をもたらすのでしょうか……？

それは……あれ、作者の私もさっぱりですw

part 2 ここは仕事場ですか？いいえ、天国です（前書き）

数字を漢数字に変更しました。

おかげで大分楽になったでえ・・・（それで時間食ってたやつ

では、第二話。お楽しみいただけたら幸いです

part 2 ここは仕事場ですか？いいえ、天国です

あれから一週間。色々あったよね、ほんと。

遊ぶ暇もなく訓練訓練。遊んでーって言っただけで殴られるし。

……そういうことは読者様がみてる場所でやれたの、もー

おおっとメタに走っちゃまったぜ、んじゃまあ、今日もゼロス君の大活劇をお楽しみにー！！

魔法少女リリカルなのは ナンパ男は六課局員

【part 2 ここは仕事場ですか？

いいえ、天国ですー】

「といつことで！ やってきました機動六課！！」

「誰に言ってるのよあんたは……」

「あははーまあテンションあがるのはしょうがないよー」

そう！ 新品ピッカピカな隊舎に最新設備！

くうううーオンボロ部隊の隊舎がかすんでみるぜ！！

「ティアナちゃん、これからどこ行くのー」

「抱きついたら殺すわよ。えつとね、まずは受付に認証してもらって、それからロビーで待機。ですって」

ああ、新人隊員のあいさつとかね、俺様長いのは嫌いなんだけどな……あ、嘘つすデバイス起動しないでください。

「んじゃま、行きましようかね。一年間お世話になる場所に」

「えーと、ま。長い挨拶は嫌われるんで、これくらいにしておきます。」

では、機動六課課長兼部隊長、八神はやてでした」

おおう……ほんとに短かったなオイ。

結局ロビーに集められて部隊長挨拶って流れだったんだけど、基本こういうのって長いじゃん？

だから寝よっかなーって思ってたらもの数分で終わりました。こうして俺様の睡眠時間はなくなるんですよね。

「そー念話回線開けばなしやから思ってることばればれやでー」

念話の回線は常に秘匿にしましょう。お兄さんとの約束だぞっ

……なんだろうっ、空しいね。

「ということで、残りのフォワードとの待ち合わせ場所までやってきたわけだけどー」

「なんていうか、暇だねー」

「……のんびりしすぎよ、あんた達」

お茶啜つてのんびりしてたらまた怒られました。

でもなあ、そんなにピリピリしてたら一日で精神力すり減っちゃうぜー

……そうか、そういうことだったのか。

「年中ピリピリしてるからそんなツンデレにうぼあー」

撃たれた！ また撃たれたよ俺様！

なんか一週間前とかずっと俺様撃たれっぱなしじゃん！ それしか芸ないみたいに思われちゃうよ！！

「勝手に思われてなさい、年中セクハラ男」

ぐっ、それを言われると痛い……だが！

訓練校時代の俺様の親友（現在は陸士隊入りのモブ君）に教えてもらったこのナイスなセリフを言えば！

「セクハラ？ とんでもない。俺様のおめがねにかなう美女達を、査定しているにすぎない。」

つまり俺様自身が物差しで測ってあげてるんだよ！
D o y o
u n d e r s t a n d ! ? 」

ふっ、このセリフさえ言えば、どんなハニーも……

「うわぁ……」

「うわぁ……」

……あるえ？ なんざましよ、この絶対零度の視線。

軽く人殺せそうだよこの視線いたいいたい。

「さいてーゼロスさいてー」

「今日こそはもうこの色欲魔許せないわ、スバル、やっちやいなさい」

このあと、俺様は地獄を見たんだ。

青色の悪魔がその剛腕で腹部を貫き、
橙色の狂戦士が脳天を弾丸で貫いたんだ……

あの時は本当の恐怖をこの身で知ったね。

「……あの」

「……ええと」

「ん？」

やばい人×2にポッコポッコにされてボロ雑巾のように捨てられた俺様の視界が、二人のちびっこを捉えた。

ああ、この二人か、残りのフォワードは。

「あー、君たち？ 残りのふたりって」

「は、はい！ エリオ・モンディアル二等陸士と」

「キャロ・ル・ルシエ二等陸士であります！ あとこっちは白竜のフリード」

「きゅく〜！」

ほほう……この年で二等陸士とな。しかも片方はレアスキル持ち。

……泣いていいですか。

「え、えええ！？ なんで急に泣き出すんですかっ！？」

突然地面に顔密着させて泣き出す俺様に赤毛のチビ。ちょっと俺様に似てるやつが話しかける。

ほう、こやつは案外弄くり甲斐がありそうじゃのう。

「ぐう……俺様が苦勞して手に入れた階級をこの年で抜かすなんて」

「あ……」

俺様が言ったことを真に受けて、そのままうつむいてしまう赤チビ。よし、釣れた！

「……おまけに可愛い子連れてるなんて、リア充はしねばいいんだっ……！」

「す、すみませ……ってうえええっ！！？」

あーっはっはっは！！！！ 見事にひっかかったよこの間抜けめが！
お笑いの世界は釣るか釣られるかなんじゃー！

「いや僕お笑いの道なんて入ったことないですよ！？」

「か、可愛いつて……」

赤チビはそのままいい反応を、ピンクちゃんは顔を赤くしてテレテレしている。

……ほう、これは中々。初やつよのお。

「十歳にセクハラすんなアホ」

「(´・`・´)によるん」

本日三回目の発砲、ありがとうございました。

「あ、そろつたね」

女神 はい た！！！！！！

「た、高町たいちよー！ ティアナとスバルがいじめるー！！」

「え、ええ？」

俺様が高町隊長に抱きつこうとすると、それをひらりと避けて顔を

ひきつらせている隊長がいた。
むう、俺様の抱きつきを避けるとは、やはりエースオブエースは侮れん。

「なのはさんにセクハラするなあー！ーッ！」

高町隊長が俺様が悪いと決め付けた瞬間であつた。次こそは抱きつきたいと思います。

「え、つと。とりあえず全員そろつたよね」

「「「「はいつ！」「」「」

「は、は〜い……」

未だ顔を引き攣らせながら確認をとる隊長に、俺様たちはその場で整列して返事を返す。

まあ腹部のダメージと頭部ダメージがマツハでやばい俺様はだらけた返事となつてしまつたが。

「あとは、お互いの確認なんだけど……」

「あ、それはまだです」

「そうなんだ。じゃあ私書類届けてくるから、そのうちに確認して終わつたら待機ね」

「「「「「はいつ」「」「」

よし、今度こそちゃんと返事できた。

このままキリッてやつたらどんな女の子も落とせること間違いなし

だね。

「ゼロスマじウザい」

「右に同じく」

……俺の扱いがこんなにひどいわげがない（キリッ

「……で、エリオがガードウィングね」

「はい！ あとはルシエさんがフルバックです」

なるほど、エリオは俺様と同じポジかなんだ、結構バランスとれてんじゃん。

「キャラが全体的なバックアップして、ティアナがキャラの支援受けて射撃。」

んでもって俺様とエリオがスピードで追いつめて、スバルが決める。」

「あたしは支援なしでも撃てるから、あんたがブースト受けなさいよ。魔力量極端に少ないんだし」

「あ、あの！ 私は2人でもブーストはかけられますよ！」

「いや、キャラちゃんにそんなに負担かけられねえ。俺様はエリオと上手くやるからお前がつける」

「……」こういつときのゼロスが素だったらなあ」

「あ？　なんか言ったかスバルちゃん」

「う、ううん、なんでもない！」

……？　変なやつだな。急に黙り込んで。

まあいいや、これでこのチームの基本形態。大体纏まったな。

「みんなー、そろそろ終わったかなあー？」

「はい、ちょうどいいタイミングですよ。高町隊長」

「え……？　あ、うん。わかった。じゃあ早速訓練に入ろうと思うんだけど、いいかな？」

……あれ？　俺様普通に返事したよね？

なのになんで隊長は「わけがわからないよ」的な顔してたの？　ねえ、なんでエリオ。

「ぼ、僕に聞かれましても……」

「ちっ、そこは乗ろうぜエリオ」

「なににですか！？」

ふっふっふ、こいつとはルームメイトだし、これから弄くりまくりの一年になりそうだけ。

つと、その前になんてなの？　ねえ教えてよみんな。

「じゃあついできてー」
「「「はい!」「」」

……無視ですか。そうですか。

「よし、じゃあみんな整列！」

訓練着に着替えて集合した俺様たちはその声に反応して綺麗に整列する。

……あれ？ あの横にいる綺麗なお姉さんは誰ぞ？

「じゃあ早速訓練に入りたいと思うんだけど。まずはデバイス、返しておくね」

高町隊長がアイコンタクトすると、横の女性は俺様たちに預けていたデバイスを返してくれた。
でも、1つだけ気になることがあるんだけど……

「その中にはデータ収集用のチップが入ってるから、大切に扱ってね。」

「じゃあ、質問とかはある？」

「あ。たいちよー、ちよつといいですか？」
「ん？ ゼイロス君、なにかな？」

俺様は目の前で、演算機能もない、デバイスとしてではなくただの剣を鞘から引き抜いた。

「俺の武器、デバイスじゃなくてただの武器なんですけど、どうやって……」

「ああ、それはね、流石にこれからはデバイス機能もないときついと思うから。」

簡単なデバイスシステムだけ組み込んで、チップは柄の部分に入れてあるから、安心して」

「はあ」

俺様の質問にふっつーに返答してくれた。なるほど、だから少し形状が違うのか。

まあ簡易デバイスになったと思って頑張りますかね。

「じゃ、この人を紹介するね、今回、六課のデバイスの調整とかに携わってくれる……」

「シャリオ・フィニーノです！ みんなにはシャーリーって呼ばれるから、みんなもできればそう呼んでね」

ほほう、眼鏡美女ときたか。やはり六課はハードルが高い。しかも性格もいい人そうだし、点数が高いぞ、うむむむ……

「ゼロスのえつち」

「ちよ！？ 誤解だよスバルちゃん……」

やっぱり、長年やってきたこの癖だけはどうにも抜けないね、やっぱり。

まあ辞める気もさらさらありませんがね！　だっひゃひゃひゃひゃ

！！　うおおあっ！！？

「な、なんじゃこりやあー！」

「なんで太陽にほえてそんな人のセリフが出てくるんですか！」

お、エリオ。いいつっこみだ。

そのうちお前も立派なツツコミストに……　って違う！！！！

「高町たいちよー。ありや一体なんですかね」

「あれ？　ふふっ。最新設備のシュミレーターだよ。大型のね」

やっべー！　最新とかまじかよ！　かつこいいなオイ！！！！

あれかな！　リアルバイ　ハザードとかできんのかな！　はたまた

コー　オブデュー　イーか！？

あ、でも俺様剣だからシューティングとか無理だわ、いいなティアナ。アンカーガンちょうだい。

「銃口こからでた弾丸なら脳天にプレゼントしてあげるわよ」

「すいませんした、刀で十分です」

side:out

「……なんだ、あれ」

「おおヴィータ。ここにいたのか、何をしている？」

訓練所から少し離れた六課隊舎の近く。

その場所に、その小さな体ながら圧倒的な力を秘めた鉄槌の騎士。ヴィータはいた。

まあもつとも、現在はフォワードの方向を見てひたすら呆れているのだが。

しかし、そこにもう一人の人影が現れる。

彼女もヴィータと同じく、騎士の名をもつ。

八神はやての騎士であるヴォルケンリッターの将。シグナム。

どうやらヴィータを探していたようで、隣に並ぶと、彼女もまた訓練風景を見始めた。

「お前は、いいのか？」

横目でヴィータを確認しつつ、シグナムは呟いた。

しかし、その答えはNOだ。

「あたしも自分の訓練したいし……同じ分隊だ。あたしが空でなのは守ってやらねえと。それに」

「……？ それに、どうした？」

少し歯切れの悪いようにヴィータが言葉を止めると、そこにはゼロスの姿が。

ほかの4人とは明らかに違うテンションの上がりっぷりに、呆れるのみである。

『スバルちゃん！ リアルコー オブデュー イー！ リアルコー
オブデュー イーだぜ！！』
『あー！ 言われてみれば確かに！ AK！ AKが欲しいよゼロ
ス！！』

拳句の果てにスバルまで巻き込んで馬鹿騒ぎである。というか戦争
ゲームを局員がやっていていいのか。
それを置いておいても、訓練に支障がでるのは确实だろう。

結局スバルはティアナが、ゼロスはエリオとキャロが引つ張ってい
ってしまった。

「……………なんだ。あれは」

「……………あたしが聞いてえよ、はあ」

不安だ。そんな呟きが二人の間に漏れたのは、仕方のないことなの
だろう……………

コールオブデュー イーは突撃こそロマンだ（ 月×日 ゼイロス・
オズウェルト& amp; スバル・ナカジマ）

part 2 ここは仕事場ですか？いいえ、天国です（後書き）

ゼロスのキャラがだんだんだの変態になっていく不思議。
次回は来週の月曜日です。

part3 実戦訓練はできるだけ目立たないようにしましょう(前書き)

第三話、投稿でございます。

今回はちよいゼロス君が真面目なので、すこし助かりましたよ(汗

まったく・・・あの変態は書くのが面倒すぎる)オイ

ということとで文章能力0の私が書く訓練回、駄文なのは元からです！
では、どござー

part 3 実戦訓練はできるだけ目立たないようにしましょう

俺様とスバルが二人でリアルデューイーに思いをはせていたらなんか引つ叩かれたでござるの巻。

いいじゃんゲームの話題で盛り上がったって！俺様とスバルはオンラインではちつとばっかし有名なんだぞ！

「時と場所を考慮っていつてんのよ、あと余計な情報はいらない」

「これだからロマンをわからないツンデレ女は、ねースバルちゃん」

「ねー」

「死・ね」

恒例の銃撃。毎度ありがとございました。

「さて、今回の作戦なんだが。さっき言われた通り実戦だ。

俺様やティアナち達はともかく、エリオとキャロちゃんはまだ不慣れな点がある。

でもしっかりフォローしてやつから、安心して取り組め、いいな」

「「はいっ」」

「いい返事だ。んでもってティアナはスバルとエリオのフォロワー。俺様間に合わないときもあるから。」

全体が見渡せて、なおかつフォロワーがしやすい場所で陣取って射撃な」

「そんな場所……どこにあんのよ」

「自分で考えろ、それが司令塔の役割だろ」

「……今のおんたのほづがよっぽど司令塔っぽいけど」

ああ？ 人に真面目になれって言うておいてなにを言ってるんだテ
イアナちゃん。

「俺様はあくまで陣取りとフォーメーション確認。」

「実戦と始まってからの指示とかはティアナちゃんの役割でしょー」

「よ。」

「……そうだけど。はあ……あんだ、普段からこうなら女も寄り付いてくるのにね」

「なっ！？ それっていつもの俺様が馬鹿みたいじゃねーか！」

「馬鹿じゃない」

「……くそう、ここに味方はいないのか！」

「私がいるぞー！」

「あ。スバルちゃんはいいです」

「ゼロスが酷いっ！？」

えーだってーこういう口論のときスバルちゃん役に立たないですし、むしろ邪魔ですし、おすし。

もうこの際エリオでもいい！ なんとか言ってやってくれ！！

「ええ！？ えーと……えーと……ぜ、ゼイロスさんが悪いと思いますっ」

「俺様の味方一人もいねえじゃねえかこんちくしょう」

エリオ、お主この一日で言うようになったな……
ならキャラ口ちゃんなら！！

「はわっ！？ えっと、うんと……とにかく頑張ってください！」「緊張しすぎ。ガム噛む？」

「あ、はい。ありがとうございます」

はにかみながらガムを貰って噛み始めるキャラ口ちゃんになごみつっ、俺様達は訓練開始を待つ。

「あ、っていうかゼロス。あんたいつもガムもってるけどなんで？」

「飴もあるぜっ！（キリッ）」

「いや、そういうことじゃなくて……」

まあ真面目に言っちゃうと俺様はなぜか街とかに出ていると迷子とのエンカウント率がすごい。
どれくらいすごいかってーと……

暇だ！ 本を買いに行こう！ よし、街に着いたぞ！ 迷子とばっ

たり。

的なことがいっぱい！ 迷子でなくてもなぜか子供と出会うのがすごいだよ。

そのせいであやす為に飴、ガム持ってたら癖になった。まあ自分でも小腹すいたら食べるし結果オーライじゃね？

「ああ、だからか」

「ん？ なによスバルちゃん」

リボルバーナックルを装着しつつこちらを見てくるスバルに、俺様は疑問を持つ。

あのスバルちゃんがなんか達観したような目で見てくるのだ、そりゃ疑問でしょーよ。

「ゼロス、緊張してたエリオとキャロを一生懸命ほぐそうとしてたからさ。」

お兄ちゃん肌なんだよ。ゼロスって」

微笑みながらこちらを向くスバルちゃんに、若干目を奪われながら少し嫌な単語が出てきた。

お兄ちゃん……お兄ちゃんねえ……………

「兄貴なんて……そんなにいいもんじゃねえよ……………」

「ん？ なにか言った？ ゼロス」

「え？ ああいやなんでもないよティ〜アナちゃん」

「抱きつくくなっ！」

「おぶらていおぶらたはんぶらびっ!？」

そう、俺は……………俺様らしくしてればいいんだよっ!

……………あ、気持ち悪いですか、そうですか。

魔法少女リリカルなのはStrikers ナンパ男は六課局員

【part3 実戦訓練はできる

だけ逃げるようにしましょうっ】

「ただど任務を遂行するときに、必ず出てくる敵がいる……」

その声がしてから数秒後に、俺様たちの目の前に8つほどの魔法陣が姿を現した。

そしてそこから出てくるのは、なんだ！　なんかこう、ザ　的なものか！　量産機なのか！！

『自立型魔導機械、ガジエッドドローン。これは近づいてきたら攻撃するタイプだね。攻撃も結構鋭いよ！』

シャーリーさんの声とともに現れたそれは

「………何？　あの明らかに雑魚臭漂う機械は」

ザ　のほうがよっぽど怖いなんか触覚だした機械がでてきた。

『それじゃあ、このガジエッド8体を十五分以内に破壊。わかった？』

「……………はい！（は〜い）……………」

ガジエッドが沈黙を守っている中、俺様は2本の剣に手をかける。こっこののはね………！！

「じゃあ、開始！」

「
見敵必勝ッ！！！」

サーチアンドデストロイ

振り下ろされた剣は、逃げ出した8体のうち、1体が切り裂かれて爆散する。

ちっ残り2体くらいぶっ潰せたのに！ こいつらすばしっこいぞっ！

「スバル！ エリオと連携して追いかける！」

「了解（です）！」

指示を出して、俺様自身はチャンスをつかむためにビルの上へ。ちっきしよう、あんなにすばしっこいなんて聞いてねえぞ！！

「おりゃあああああっ！」

よしスバル、そのまま……ってあ？

あいつ……もしかしてエリオ置いてきやがったか！？

「おい待てスバルッ！ 連携を崩すな！」

そんな俺様の声を無視して、スバルは渾身の攻撃をガジェットに放つ。
しかしそれをゆるりと受け流して、ガジェットはまた逃走を始めた。

「ちっ、ティアナ。狙撃！」
「わかってるわよっ!!！」

少し遠くに離れたティアナとキャラちゃんに射撃を求める。
このまんまじゃ十五分どころか一日かけても勝てねえ、なんとかしないと……

「はああああっ！」

パァンツとアンカーガンが火を噴き、ガジェットへとぶつかる。
よし！ つてなぬっ!？

「当たってない、バリアか！」

「いえ、多分、フィールド系です!!！」

キャラちゃんかの声に思わず額に汗が浮かぶ。
魔力を通さないフィールド……？

そう疑問に思った時、再びモニターが空中に浮かんだ。

『そう、ガジェットには少し厄介な機能がついてるの。
アンチマジリングフィールド。通称AMFは魔力を通さない、普通の攻撃は効かないよ?』

たいちよー。そんなのは開始時に言っただけです。
おかげで変な推測立てちまったじゃないですか！

『それに、AMFを全開にされると足場とかも不利になっちゃうし、飛行も困難。』

『ただど対抗する策はいくつかあるよ。素早く判断して素早く動いてみて』

『ずいぶんとむつかしい問題だしてきますね、隊長。』

『さて、どうするか……あ、スバル吹っ飛んだ。おー、いたぞ。俺様ああなりたくはないね。』

普通に斬り込んでも絶対避けられるし、撃ち込んでも消される。

『たたく、誰だよこんなの考案したやつ、捕まえたら取り調べでばこぼこにしてやらあ。』

『つと、少し真面目モードに切り替え切り替え。』

『ティアナ、キャラちゃんっ！　なんか策あるか！』

『「1つだけ！」』

『「私も、やってみたいことが！」』

『「よし、んじゃ足止めは俺様達がするから後頼んだッ！」』

後ろから結構な魔力があふれているのを背中でも感じる。

『おいおいティアナ。お前いつのまにそんなに魔力量あげたのよ。あ、キャラちゃんのブーストか。』

side:out

「おーみんなよく走りますねー」

フォワード部隊の実戦訓練。

その様子が映し出されたモニターを、シャリオことシャーリーは嬉々とした表情で見つめていた。

「まだ危なっかしくて、ドキドキだけだね」

その横で同じく楽しそうにフィールドを除くなのは。

口ではああ言っているが、本心は育て甲斐のあると思っけてわくわくしているのだろう。

「デバイスはどう？ シャーリー」

「いいデータが取れてますよー5人ともいい子に仕上げます！」

5つに分割されたモニターのなかに、それぞれのフォワードが映し出されている。

もっとも、ゼロス自体は最初の初撃しかやっていないのだが、それで十分すぎるのだろう。

「ゼイロス君は初撃の反応と剣を振るスピード、魔力量自体は極端に少ないけど、戦闘経験は豊富そうですね」

「彼だけ実質B-。ちょっと冷や冷やだったんだけど、これならなんとかなりそうだね」

「はい、デバイス扱ったことがないって言ってましたし、魔力のこともなんとかなりそうですよ」

デバイスを1から組み立てるなんて、楽しみですねーフフフフ……
そう呟くシャーリーに、なのはは若干の恐怖を覚えたとか。

side:ゼロス

作戦が決まってすぐさま行動に移るために、俺様はビルから思い切り飛び降りた。

「よし、道ぶつ壊して上に誘導するから試してみる！」

返事はない。だけどきつと伝わっただろう。
思い切り剣を引き抜いて空中で足場をつくり、それをバネに思い切り飛び上がる。

……そういえばこの技名前付けてなかったな。
お、かつこいい名前思いついた。これでいいこう。

「爆砕刃ア！！」

「「ダサッ!?!」」

「にょろ〜ん」

2本の剣から撃たれる剣戟型魔力弾。
イカす名前だと思ったのにコンマ数秒でスバティアにダサイ認定されたでござる。

だけど結構いい感じの威力だったようで、地面を思い切り抉ってアスファルトの壁を作り出した。

所詮無人操作。その行動は筒抜けで……

「フリード、ブラストフレア！」

「きゅく〜！！」

……おお、チビ竜め。火なんて吐けたのか。

その火は思い切りガジェットの群れへ衝突し、辺りを火に染める……が。

「き、効いてねえ……」

火花をあげながら、未だ飛行を始めるガジェット。どんだけ堅いんだよ。あれで量産機とかどんだけ。

「我が求めるは戒めるモノ、捕えるモノ、言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。」

錬鉄召喚。『アルケミック・チェーン』！！」

だが、あれは単なる足止めだったらしい。

召喚で鎖呼ぶのか。ほえー、すっげえな召喚士。ゲームでも存在感パネえもんな。

「つと、3体も逃げやがった！」

第1回模擬戦した。がんばった、でも撃墜したの1機だけだった。
明日から本気出す（月日ゼイロス・オズウェルト）

part 3 実戦訓練はできるだけ目立たないようにしましょう(後書き)

ゼロス君実は結構頭キレるタイプでした&でもあんまし活躍しなかった回でした。

どうだったでしょうか？わたし에게는やはり戦闘が・・・
誰か、私に戦闘描写とギャグの文才を分けてくださいorz

あ、言い忘れていましたがこの小説、基本的に週一の月曜日投稿となります。

さっきアクセスとユニークみてびっくり返りました。まさかの六千越え・・・

こんな作品をお気に入り、または評価してくれた皆様には本当に感謝いたします。

これからも応援してくれると幸いです。では、また来週

part 4 ファースト・アライト 1 (前書き)

第四話、投稿ですだ。

今回は日常 任務っていう流れで行きたいと思います。

ファーストアライト編はゼロス君の過去にちよいと触るので、気合入ってます！w

では、どうぞ

・・・あ、感想くれてもいいのよ？(チラッチラッ

そんでもって私のテンション振り切らせてもいいのよ？(チラッチラッ

っと、少し長すぎますねwでも感想はほんとに欲しい。切実に(エでは、今度こそどうぞー

part 4 ファースト・アラート 1

あれから数週間。あれ……？　なんかこの始まりデジヤヴ？

まあいいか。六課に来てから毎日訓練ずくしの日々が過ぎてったんだってばよ。

相変わらず俺様はサポートにしか回れずに悔しい思いをなんどしたことか……

でもなんとなくエリオとは仲良くなれた感じはするけど、やっぱりキヤロちゃんが問題なんだよな！。

なんか周りと距離を置いてるといっつか、なんといっつか……エリオにも心開いてないっぽいし。

なんとかかなんないかな……という感じで、初めて真面目に振り返ってみた。ゼロスでした！。

魔法少女リリカルなのは ナンパ男は六課局員

part 4 ファースト・アラート

「…………むむむ」

あ、どうも。先ほどお会いしましたねハニー達。あ？ 野郎はいらん。

……………すみませんでした。だから右上の×ボタン押さないで、土下座するから。

「何急に土下座してんのよ。あんた」

「いや、なんか謝んなきゃここ崩壊するかと思って」

「変なのー」

ティアナ、スバルが俺様のことを怪訝に見ているが、意識は完全に向いていない。

向けているのは自分達のデバイス。そう、壊れちゃったんだよ。俺様達の。

今朝の訓練、高町隊長に一発入れたら終了っていう模擬戦という名のデスゲーム。

エリオがめっちゃくちゃ頑張ってくれたおかげで一発入れられたけど、無理しすぎてぶっこしちゃったんですよ。

とにかくエリオにはがんばり賞として飴ちゃんあげよう。

「あ、ありがとうございます」

「うむ。よきにはからえ。にしても、もともと自作だったから覚悟はしてたけど、流石に凹むね。こりゃ」

俺様の剣も、一本は罅で済んでるが二本目は鍔から先が完璧に折れてしまっている。

ガジェット相手に生身で突っ込ませたからなー……あと演算の任せすぎか。

スバルのローラーも煙立ててるし、ティアナのもすでに弾撃ち出せたら奇跡なくらいだし。

今出勤かかったらフォワードまともに動けるのエリキャラロだけだし、なんとかしないと。

「うーん、みんな戦闘だいぶ慣れてきたし。そろそろ実戦用に切り替え、かなあ」

「実戦用ですと!?!」

あれですかたいちよー！　これで俺様も専用機持ちつつすか！　赤い彗星ですか!?!

「ぜ、ゼイロス君近い近い近い!」

「なのはさんにセクハラしないでよっ!」

「リボルバーっ!?!」

さすがなのはさん大好きツ子。思い切り殴りやがった。

にしても興奮しすぎだな。深呼吸深呼吸。すーはーすーはー……よし落ち着いた。

「すいません隊長。取り乱しました。彗星なれると思ったら自然と

気持ちが高ぶってしまって」

「う、ううん……わかればいいんだけど。そもそも新型作る為にデータとってたわけだし。」

シャーリーと私が、みんなにぴったりあった最高のデバイス、作るよ!」

「お任せあれー!」

なるほど、この二人なら任せたらきつとすごいデバイス作るに違いない。

なにより俺様ちゃんとしたデバイスなんてもったことないから楽しみで仕方が無いぜ。

「じゃ、詳しいことは隊舎に戻りながら話そっか。色々言わなきゃいけないこともあるし」

「……はい!」「」「」

訓練の疲れなんて吹き飛ばして意気揚々と帰る俺様たち。

とりあえず、どんな形状になるのかを楽しみでしようがない俺様であった。

「なーエリオー」

「あ、はい。なんですか? ゼロスさん」

あれから着替えてデバイスルームに集合といわれた俺様たちは、と
りあえず制服でそこを目指していた。

……フェイトさんがあんなvip顔負けな車乗ってるのにびびった。
あと部隊長に求婚したけど玉砕したでござるの巻。

あ、そういえばキャロちゃんとエリオ、仲はどうなったんかな？

男二人だ。ちょうどいい、今のうちに話しちまおう。

「お前さー、キャロちゃんのことどう思う？」

「え……ルシエさんですか？ やさしくて、思いやりのある人だと
思いますが」

……そうだった、こいつ思いっきり堅物なこと忘れてた。

「そうじゃねーよ。そんな通過儀礼みたいな言い方じゃなくて、
お前からまだ十歳なんだし、歳相応の答えというものをだな……」

「歳相応……ですか」

少しだけ顔を俯かせて、考え込むエリオ。そこまで深く考えなくて
ええーっちゅーねん。

すると急に顔をあげて、思いっきり大声で叫んだ。

「る、ルシエさんは可愛いと思います！」

「え……？」

「あらあら」

「まあまあ」

結局、この数分後に高町隊長がエリオを捕獲してくる数十分間俺様たちは微妙な空気に包まれた。そしてエリオをけしかけたとあらぬ疑いをかけられてサンドバックにされたでござる。

……先生、優しさが欲しいです。

「あ、そういえば」

「ん？ どうしたキャロちゃん」

ようやく落ち着いたか、キャロちゃんがデバイスを見てティアスバ & amp; 俺様を見てくる。

ちなみにエリオはまだ撃沈中、ええ加減元に戻れっちゅーねん。

「みなさんは全員手作りデバイスですよ？ 訓練校のときなんて一緒にチームだったんですか？」

「結構鋭い質問だなー……まああれだ。ぶっちゃけ言つと教官に無理やり組まされた」

「け、結構強引な教官さんだったんですね」

そうそう、やばかったぞあの教官。ティアスバはともかく、俺様は色々敬遠されがちだったから一人でやるうと思つてたのに。

「ま、おかげでずいぶんと長い腐れ縁状態ってことだ」

「ゼロスに言われたくないよ」

「スバルが酷いっ!？」

最近ではセクハラ自重してたのに、思いっきり乳もむぞこのやろっ!

「腐れ縁ならいますぐその腐った鎖引きちぎって逃げ出したいわ」

「ティアナちゃんそんなこと言わないでちょーだいよー」

「くんなっ!」

「(･･････)」

デバイス無しで撃ちますかそうですね。

「えーっと、これからデバイスの説明したいんだけど･･････」

デバイスルーム、その入り口付近に整列している中の俺様を、高町隊長がちらちらと見ている。

もじゃ! 俺様の美貌に惹かれて･･････!

え? 何? 勘違い乙ww? 夢くらい見させるこのやろっ。

「な、なんでゼロス君はポコポコなのかな」

「気にしないでください、恒例です」

やっぱりそっちな。まあ思い切り顔面ぼこぼこだから仕方ないか。

しかしティアナめ、顔面に魔力弾直撃させるとかどんな鬼畜よ、おまけにエリオも参加してたし……

あれ？　なんかイライラしてきた、今度訓練の時足引っ掛けてやるう、そうしよう。

「じゃ、じゃあリン曹長。よろしくね」
「はいです！」

そういつた高町隊長の背中から、ひょっこりと顔をのぞかせたのはリンフォースさん。
ちっちゃいけど、俺様より階級すんげー上なのよね。

そんなちっちゃな曹長はデバイスと思われるものを全員に配ると、俺様達の目の前に止まった。

「この五機。この子たちは前衛メンバーとメカニックが経験と技術の全てを集めて作った最新機です。

スバル、ティアナ、エリオ、ゼイロス、キャロ。それぞれの個性とスタイルに合わせて各自が全ての能力を全力で解放できるように作られた、文句のつけどころのない最高の個体です！」

うれしそうに語るリンフォースさん。その喜びようからしてかなり頑張ったのだろう。

自身もデバイス故に、その喜びは凄いんだろうな。

すると俺様達のデバイスを中に浮かべて、しゃべりだした。

「まだまだ生まれたばかりの機体ですが、いろんな人の思いや努力

がこめられてて、

一杯時間をかけてようやく完成したんですよ。だから、ただの道具、武器と思わないで、大切に、でも全力で使ってあげてほしいです」

「それをきつと、この子たちも望んでるよ」

……へえ。このカードがねえ。

俺様は自分のデバイス、ティアナもそうだが、それよりもっと薄っぺらいカードを手に取り、眺める。

……そうだな、こんなに薄っぺらいんだし、破かないようにしないと。

「……でも、やっぱりみんなのデバイスってなんかしらかかっているんですか？」

「ティアナ、いい質問ですね！　じゃあなのはさん、ここからはよろしくおねがいしますです！」

ティアナの質問で、リンさんはみんなにデバイスを返して後ろに下がった。

そして、長い説明が行われた。

まず要約すると、俺様達のデバイスにはリミッターといわれている魔力抑制装置がついているらしい。

たしか三段階……だったかな？

それと同じものを、隊長達も使っているんだと。

それならこの六課の馬鹿みたいな戦力も領ける。
隊長達が2・5ランク、部隊長が4ランクダウン。すっげーよな、
こんだけダウンしてて俺様達叶わないんだから。

しかも隊長達のリミッターは聖王協会のお偉いさんや、フェイト隊長のお兄さんしか解除できないんだって。

……にしてもほんとに馬鹿げた戦力だよなあ、あれ？ 俺様もしか
しここの平均下げる為に入れられた？

……… だとしたらシヨックだよな。

デバイスのことに関しては午後の訓練で少しずつ。といった感じだ。
はい、ゼロス君の解説タイム終了！

「スバルのナツクルはその中に入ってるから、持ち運びも楽にして
おいたよ」

「ほんとですか！？ やったー！」

隊長の言葉でかなり喜んでいるスバル。

あれやたら重いからなあ、俺様装着したけど腕が振れなかったし。

でも俺のこのカードなによ？ うんともすんとも言わんし、ほんと
にAIついとるの？

「あ、ゼロス君のやつは少し特別だね」

……… 特別、とな？

やつぱり彗星か！ 「初めましてだな！ ガンム！」とか言っち
やうのか！ あ、これはハムさんか。

「武器のほうにデバイス機能はついてないから、ゼイロス君の魔力の波長に合わせて造って、体に近づけたらライダーが出てくる仕組み。」

瞬間装着機能も付いてるから、敵にいきなり襲われても平気だよ」

「……え？ どこでも出てくるの？ なにその仮ライダーみたいなやつ。」

「まいつか。かつちよいいし。」

「カートリッジはみんなより少し多めに弾数設定してあげたけど、多用はしないでね。」

「暴発の原因になるし、なにより巨大魔力の運用は危険だから」

「ういつす」

「そりゃ助かるな。俺様魔力量やばいくらいに低いし。カートリッジ問題は肉弾戦でなんとかすりゃいいか。」

「……あ、名前どうしよ。」

「まあ、午後の訓練で考えればいいよな。お前も」
『……………』

「無視ですかそうですか。」

「あわわわ！ ゼイロス君デバイス破っちゃダメー！ー！！」

「無視されたから思い切り引きちぎってやるつとしていたら、急になりだす警報の嵐。」

『ALERT』……つまり、緊急出動ってこと？

……え？

「い……つきゆう警戒……態勢？」

モニターに現れている文字を読み終わると、自然と冷や汗がだらだら流れてくる。

ど、どないすんのやーっ!?

「グリフィス君！」

俺様に対して隊長は冷静で、急いでロングアーチと連絡を取り始める。

すると、空中に眼鏡……ロウラン准尉が出てきた。

『聖王協会の出動要請ですね』

『なのは隊長、フェイト隊長。みんな、聞こえる？』

『こちらライトニング01。状況は？』

ロウラン准尉に続くように部隊長とハラオウン隊長がモニター越しに現れる。

状況は簡単に言うと、エイリの山岳付近に目標はリニアで移動中……

おい！ 無人の列車にロストロギア入れて運ぶとかどんなザル警備だよ!!! お兄さんびっくりだ！

『リアレール内のガジェッドは最低でも三十機。大型や飛行型、未確認も多数でてるから気をつけてな』

コントロール奪われてるとか言ってたし、速度出てるっばいからもしかしたら風で放りだされるぞ。

かあああ………！ 初出動がこれですか。無理ゲー臭ぶんぶんするぜ。

『機動六課最初の出勤。かなりハードな任務やけど、二人ともいけるか？』

「もちろん！」

『いつでもどうぞ。だよ』

『フォワード達も。ええか？』

「……はい」「……」

やるしかないよな。この空気。

でももしかしたらこれでいい所見せたら部隊長と夢色ライフを……
ぐへへへへ。

『ええ返事やな。じゃあシフトはA-3。グリフィス君は待機して指揮。リインは戦闘管利な。』

隊長達二人は現場指揮』

全員が張り詰めた空気の中……

『ほんなら、機動六課フォワード部隊。出勤！！』

駒は前に進んだ。さて……暴れますかね！

初任務 みんなでいこうよ リニアへと（ 月 日 ゼイロス・オズウェルトの一句）

part 4 ファースト・アライト 1 (後書き)

祝！一万PVI！！

いやはや、嬉しい限りです。やっぱり自分の書いたものを気に入ってくれるって嬉しいですね！

これからも変態ゼロスとともに精進してまいりますので、皆様の応援、よろしくおねがいします！

part 5 ファースト・アライト 2 (前書き)

少し遅くなってしまいました……

くそう、これも受験と戦場の絆のせいだ！

特に最近戦場の絆にどっぷり浸かってます。いやもう毎日行く位。

まあ、そんな作者のいらぬ説明は置いて、ファーストアライトの続きです。

結構気合入れたので、それなりにいい出来だといいいのですが……

では、どうぞ。

part 5 ファースト・アライト 2

どうも、恒例になった挨拶タイムです。ゼロスです。

最近俺様のキャラが早くもブレ始めていると思っ
ているあなたは鋭いよ。

六課の中にいたらなんか調子がくるっ
てきたんだよ。最近。

なんてゆーか……あつたかい？
みたいな。

おにゃのこがいても反応しなくなっ
たっつていうか……あ、六課がレ
ベル高すぎるから慣れたのか。

っつていう現実逃避とともに今回
始まります。あー……任務行きた
くねえええ……

魔法少女リリカルなのはStrikerS ナンパ男は六課局員

【part 5 ファースト・ア

ライト 2】

「緊張……しますね」

「あ？」

六課のヘリポートまでの道。そこを、俺様とエリキャラ
ロが歩いてい

た。
スバルとティアナは先に行ってなにかし
らしているらしい。なに
してんだが。チームメイトほっ
ぱりだして。

そいえばこいつら………ああ、そっか。こいつらこれがほんとの初出勤なのか。そら緊張するわ。

「ゼイロスさんは……緊張。しないんですか？」

キャロちゃんが不安そうにこちらを見上げて呟く。

緊張、緊張か……

「俺様はもう平気かな。最初は誰だって緊張するし。そのままいいんじゃない？」

緊張して緊張して、そうやって緊張し続けていくと、自然と慣れていくもんだ。

俺様は六歳くらいから魔法教わってたけど、流石に最初はガチガチだったし。

「そ、そうなんですか……」

「そうそう、そんなもんよ。でっひゃっひゃっひゃー!!」

笑いながらこいつ デバイスをホルスターから抜き出して空へかざす。

二本の剣が描かれたカード……こいつほんと無口だな。AIほんとにあんの？ この質問二回目よ？

「そう、ですね……」

「ありがとうございます……!!」

チビっこ二人は随分と気が楽になったか。幾分ましになった表情で見上げてくる。

訓練通りなんて実戦でできるわけがないし。その場その場で考えて

動けばいい。それだけよー！

「ゼイロスさんは「ゼロス」え……？」

エリオの言葉をさえぎって、俺様が口に出す。

流石に本名呼ばれ慣れてないから、そろそろ言っとなかないとな。

「ゼイロスって語呂悪いし、呼びづらいだろ？ だからゼロスでいいよ。俺様もそっちのほうが好きだし」

「ぜ、ゼロス……さん」

「ゼロスさん。でいいんですね！」

「ん、よろしい。素直な子は俺様好きよ？」

頭をなでてやると嬉しそうに二人ともほほ笑んでくれた。

よし、子供相手なら結構自身あるのよ俺様………ああ、このスキルを女性相手に活かせたらなー

………うん、泣こう。

「あ、あわわわっ！ 泣かないで下さいよゼロスさん！？」

「どうしたんですかー！？」

その数分後、泣きじゃくった俺様を慰める十歳二人が現場に到着するという、なんと空気ブレイカ なことをしたのであった。

「いきなり新デバイスでの任務になっちゃったけど、練習どおりで大丈夫だからね！」

六課専用の運搬用ヘリ。ストームレイダーに乗り込んで目的地へとかなりの速さで近づいている。操縦しているのはグランセニツクの兄貴。え？　なんで兄貴かって？　言わせんなよ恥ずかしい。

でもたいちよー。訓練通りは流石に無理だと思いますー。

「エリオとキャロも、ファイトなのですよ！」

「はい！」

流石に堅さは抜けきってないがいい返事。こりゃ安心だな。それにしてもガッツポーズ可愛いつすね曹長。

「さて……じゃあ今回の作戦についてなんだけど……」

隊長が空気を変えて周りに話しかけると、全員が話をやめて押し黙る。

そのあまりの緊張感を少し気にした様子だったが、すぐに切り替えて今回の概要を話し出した。

「今回はスターズ、ライトニングと別れて行動。

スターズは操縦桿を、ライトニングは比較的古ジエッドが少ないリックのほうに向ってもらうね」

ふむ、別行動とな。

俺様散り散りになるのは勘弁願いたいけど、まあ多分隊長のフォロ
ー入るから平気か。

……なんかひっかかるけど。

と、そのときだ。

『なのはさん！ 飛行型ガジェット。予測通り来ました！』

「やっぱり……じゃあ私はここで戦闘に入るけど、みんなは落ち着
いていけば大丈夫だからね！」

「え！？ じゃあフォロ無しっすか」

「大丈夫。みんなの実力なら軽くいけちゃうよ！ 素早く考えて、
素早く行動。ねっ！」

そう言つて高町隊長は行つてしまった。

……ところであの空中ジャンプって楽しいのかな。俺様高いところ大
好きだけど。

「おら新人ども！ もうすぐ着くぜー！！」

「わっかりやした兄貴イ！！」

「……（何だろう、あの生き生きとした様子）」

む？ なんか全員に痛い視線をぶつけられた。なぜだろう。

まあいいか。行くぞエリオー、キャロチャーん。

「あ、は、はい！」

「頑張ります！」

スバルたちが隊長のまねしてジャンピンググセツトアップをしたのを確認してからハッチの前に立つ。

腰のホルスターから一枚のカードを取り出す……が、無反応。

「ムキーっ！ この腐れデバイスがいい加減にせいやー！ ツー！！」

「おいゼロス、そのデバイス。スリープモードだぞ」

……は？ なんて言いましたグランセニツクの兄貴。

スリープ？ モード？ え、何？ 俺様ずっと寝てるデバイスに話しかけてたの……？

「……ちよつと飛んでくる」

「ま、待って下さいよ！」

「どうせ降りるんですから、ね！ ね！？」

少しおちゃらけたら真面目にとらえられて思い切り引きとめてくるエリキヤロ。お前ら息ぴったりやな。

……さて、少しだけ真面目モード真面目モード。

「んじゃ、おい起きろ腐れデバイス」

『……起動確認』

無口なデバイスなのね、冷たい人（？）……！ って自分で自分のボケが止まらないぜちきしょー……

えーと……どっかに魔力出してその波長でリーダーが出てくるんだ

つけ。

「んじゃ、腰に……」

「なんで腰なんですか？」

「いや、なんかカッコいいじゃん。仮面ライ ーっぽくて」

あのベルト憧れてたんだよね……流石に変身とは言わないけど。
はずいし。

早速魔力を出してこいつを近づけて……お。

「っと、ほんとにでてきたな」

『この性能は高町隊長を筆頭とした天才が造り上げたデバイスです。
故障など、まずありえないのではないのでしょうか？』

言ってくれるね。このデバイスめ。

まあその通りか。さて……名前どうしよう。

「んなもん空中で決めるーーツー!!」

「ぎゃー!!?」

「わあああああ~~~~!!?」

ついに怒られて振り落とされたでござるの巻。

つてまたボケちゃったよ! もうそんな暇ないよ!!

「あ、ああもう! とりあえずセットアップだ!」

『認証は、よろしいのでしょうか……?』

「とりあえず生きるのが先だこんちきしょーっ!」

『了解しました。私をリーダーへと通して下さい』

名前なんて後で考えればいいよネ！

ということ、レッツ変身！

「セツト、アープ！！」

『standby ready set up』

リニアに体当たりする寸前に、体を魔力の球体が包む。

そして装甲っぽいものが体を包むと、そこにはかっこいい俺様が…

…！

「って、前のジャケットとかやん。あんましかわんねー」

『今のは疑似的にバリアジャケットを生成しています。』

認証さえすれば設定されたバリアジャケットを着ることができ
かと』

あ、まじっすか。

じゃあ急いで考えねーと……あ、そういえば俺様どっちの分隊だっ
け。

『ライトニング05！なにをぼさつとやっとするですかー！！』

「あ、曹長。ちょうどいいタイミングで教えてくれてありがとうご
ざいます」

画面の向こうでは「え？ あ、これはどうもです」と曹長が頭を下
げていた。

天然ね。天然はいいよね、ヒロインとしてはさいごーよ。

「さて。んじゃあちゃっちやと決めてエリキャロと合流しますか」
振り落とされたせいで二人と俺様とで着地地点が少しずれてしまっ
た。

今のところ二人の方が少し前にいるみたいだし。はやくいかなーと
な。

『いかがいたしますか？』

「ん？ んー……んじゃ。俺様のかっこいい名前をつけますかね」

帰ったらスバティアに「ないわー……」とか言われそうだけど、や
っぱりかっこいい名前は憧れるわけで。

そうだな、やっぱり神話的なものから引っ張ってきますかね。

むー……おっ思いついた。

「認証開始。所持者ゼイロス・オズウェルトの名において命ず」

『認証開始。マスターを登録、デバイスの個体名称をどうぞ』

カードをスキャンすると同時にベルトの中に吸い込まれていったデ
バイスから発せられる無機質な声を聞きつつ、辺りのガジェットが
近づいてくる。

そしてそれらが一斉に飛びかかってくるとき、俺様は大きく叫んだ。

「個体名称、『フェンリル』。セットアップ！」

『個体名称を確認。認証終了、バリアジャケットを構築します』

体のまわりに再び出てくる青の球体。

そのバリア的なものはガジェットの攻撃を全て消滅させてくれた。

そして、出てくる俺様の姿……

「お、おお……」

先ほどの黒いジャケットと薄いシャツ。それにポロポロだった訓練校のズボンは姿を消した。

代わりに現れたのはハラオウン隊長のマントを模したジャケットと、その下には白いTシャツ。

そして見た目動きづらそうだけど十分可動域が広いジーパン。

スバルはなのはさんののに似てたし、エリオはハラオウン隊長だった。両分隊長の特徴を使ってるのね。これ……はっすかしー！

「つと、ふざけてる場合じゃねえな。いくぞフェンリル」

『はい、マスター』

まずはこいつらを潰していかないとな。俺様のデバイスの初陣は勝利で飾ってやるぜ！

「おおらっ！」

『マスター、右に二体。後ろに一体です』

「よっしやー！」

進路を妨害していた邪魔なガジェットを蹴っ飛ばして谷に落つことすと、ベルトの中に消えたはずのフェンリルが俺様に伝える。

そして振り返るとまさにその通りで、雑魚その一の俺様でさえ楽に潰せた。

ほえー……すごいなお前、空間把握までバッチリかい。

『私はサポートに特化していますので、空間把握はほかの四機より優れています。』

その代わりに戦闘面などはあまり過度な期待をなさないでください』

「そーかそーか。まあ俺様は演算と魔力運用なんとかしてくれればいいさ。」

さて、フェンリル。エリオとキャロの位置。地図に割り出してくんねえ？」

『了解いたしました』

その瞬間。頭上に出ていた地図のなかに赤とピンクの反応が二つ出てきた。

なるほど……そう遠くないな。全力で走れば数分で『マスター！』は？

フェンリルの声に反応し、振り返った瞬間ものすごい衝撃が体に走る。

そのまま数メートル飛ばされると、俺様をぶっ飛ばした正体が確認できた。

「新型、か……げぼっ！」

ありゃ。脳揺さぶられちゃってる、これ立てっかなあ……

引っかかった理由はこれだったんだな。そりゃそうだ。

リックなんていうのだから手が出るほど欲しいロストログアに、あんなに薄手で警戒するはずない。

飛行型で高町隊長引つ張り出して、新人諸君をボッコボコってことね。いい作戦じゃん。

『マスター、一旦撤退をオススメします』

「ああ、それは俺も賛成だ！」

地図に出ていたスバルとティアナの反応をみて、思い切り新型ガジエットのほうへ走りだす。

でかい触手を避けて、通り抜けようとしたが……

「がつ！？」

甘かった。後ろに回れば攻撃の手がないと思ってたが、その予想を無視しての攻撃。

当然そのまま俺様は後ろに吹き飛ばされ、再び振り出しとなった

ちつきしょう！ こいつどっからでも手が伸びてきやがる。

どうするか…… やっぱり応援を……！？

「通信が、繋がらない！？」

『AMFが最大範囲で作用しています。魔法行使ができません』

おいおいおい…… 任務初回で大ピンチだな…… どうするんだよ本当。やっぱり逃げ出すしか…… いや、まずあの触手が逃がさねえな。突っ込んで戦っても魔法ができなきゃ勝てる確率なんざゼロ。つま
り……

「詰み、か……？」

一歩ずつ後ずさりしながら剣を引き抜く態勢だけはとっておく。

その様子を、まるであざ笑うかのようになにもせず佇む新型。

悔しいなあオイ。お供その一が出しゃばるからこうなるんだよまったく。

しゃーねー。諦めて突っ込むしか……

「ゼロスきーン!!」

「なっ!?!? くんなこの馬鹿!!」

そのとき、先頭車両のほうからストラーダで接近してくるエリオ。しかし、それは魔力によって噴射されているブースターによるもの。

つまり、AMFの効果範囲に、それが入れば……

「う、うわっ!」

当然バランスを崩し、そのばに座り込んでしまうエリオ。それを、ガジェットは見逃さなかった。

機械音を鳴らし、その触手でエリオを吹き飛ばそうとする新型。

そのとき、俺様の脚は妙な偽善によって動いてしまうわけで。

「歯あ喰いしばっておけ!!」

「え!?!? くっ!」

思い切りエリオを殴って吹き飛ばす。もちろん落ちないように。そしてその場には、今まさに迫ってくる新型の攻撃があつて

「ぜ、ゼロスさんっ!!!?!?」

俺様は、溪谷の奥にたたき落とされた。

大空へ 飛んでしまおうよ 死んじゃうよ（×月 日 ゼイロス・オズウェルト心からの一句）

part 5 ファースト・アライト 2 (後書き)

以上、ゼロスフルボッコでお空へFly&デバイスの初陣。の回でした。

なぜかゼロスがやられるところだと異常な速さで進む筆……ざまあ
変態w(エ

さて、エリオの代わりにゼロスがぶっ飛んだわけですが……

まあ今までのセクハラの数々への咎。といった感じですよw
やっぱり変態には一発かまさないと反省しないんだよ!うん!

ということ、お楽しみいただけたなら私は幸いです。
では!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7871y/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS ナンパ男は六課局員

2011年12月19日19時49分発行